

東南アジア史学会会報 No.37

昭和57年10月

研究大会報告

東南アジア史学会第27回春季研究大会が、去る6月5日(土)、6日(日)の両日、慶應義塾大学三田校舎・塾監局3階会議室にて開催されました。会員100余の御参加をえ、大盛況のもとに幕を閉じることができました。会場をお引き受けいただきました慶應大学に対し厚く御礼申し上げます。大会での報告及び公開講演の要旨は以下の通りです。

サラワク・イバン族の超自然世界

イバン族の宗教・世界観の核心には《生の隠喻》と称すべきテーマが存在している。それは一方では人間の生を外界=自然界の事物のあり様に仮託する表現法であり、また他方では世界の諸現象を人間の生にひき寄せて解釈ないし説明しようとする態度である。この点でイバン族の世界観はタイラー=フレイザー流の一あるいはインドネシアの文脈においてはクロイト流の一古典的アニミズムの諸特徴を多く備えているといえるかもしれない。しかしこれを隠喻の集合体ととらえることは、因果的論理にかたよりがちなアニミズム説に対して、より状況的な位相での世界観の表出を探りうるという利点をもっている。

個々の状況下で《生の隠喻》は多様で流動的なかたちをとる。一例として靈魂(スムンガット)をめぐる観念の異同をとりあげる。イバンの文化は一般的に言ってかなりはっきりした人格的靈魂の概念をもっているが、その属性は語る人ごとにしばしば相剋しあい、

ビルマの精霊信仰再考

佛教徒ビルマにおける精霊(Nat)信仰は佛教と併存あるいは対立するものと位置づけられ、両者が重層信仰をなしているとされる。しかし一般の村落生活において、Nat信仰は、生活の前面に出てくるものではなく、佛教と異なって人々の話題になることも少ない。Nat儀礼は専ら女性の手によって行われ、男性の一部はNatの存在に懷疑的で興味本位の受け

内堀基光

また自家撞着の言説に出会うこともまれではない。靈魂の形状、意識的人格との関係、靈魂の在処などについて人々の「知識」の変異は大きい。もし宗教に何らかの「原始性」の指標がありうるとすれば、正統あるいは公認教義の不在をその一つとしてあげることができよう。その意味でイバンの宗教はすぐれて「原始的」であるといってよい。こうした信仰体系を分析するとき、そこに形式論理上の整合性を求めるることは無益であり、むしろ生の隠喻的イメージがその場その場で形成あるいは選択されることに注目する必要がある。この形成・選択は状況に応じた行為者の関心に規定され、その時々で同一の言語的表象に異なった内容が付与されることになる。したがって、人類学者として民族宗教に接近するためには、個別文化に内在する隠喻の生成原理とその具体的状況下での発現とを区別することが探究の出発点となる。

田村克己

止め方をしている。それは宗教的位階の上で、Natが男性と女性の位の中間にくるとされるからである。このようにNatの存在に佛教的世界観の中に組み入れられている。何よりも佛教徒ビルマにとって、宗教(thadana)は佛教であり、Nat信仰は宗教と考えられていない。礼拝行為を指す語も両者において異なる。人々のNatに対する態度は、災厄除去

東南アジア史学会会報 No.37

昭和57年10月

研究大会報告

東南アジア史学会第27回春季研究大会が、去る6月5日(土)、6日(日)の両日、慶應義塾大学三田校舎・塾監局3階会議室にて開催されました。会員100余の御参加をえ、大盛況のもとに幕を閉じることができました。会場をお引き受けいただきました慶應大学に対し厚く御礼申し上げます。大会での報告及び公開講演の要旨は以下の通りです。

サラワク・イバン族の超自然世界

イバン族の宗教・世界観の核心には《生の隠喻》と称すべきテーマが存在している。それは一方では人間の生を外界=自然界の事物のあり様に仮託する表現法であり、また他方では世界の諸現象を人間の生にひき寄せて解釈ないし説明しようとする態度である。この点でイバン族の世界観はタイラー=フレイザー流の一あるいはインドネシアの文脈においてはクロイト流の一古典的アニミズムの諸特徴を多く備えているといえるかもしれない。しかしこれを隠喻の集合体ととらえることは、因果的論理にかたよりがちなアニミズム説に対して、より状況的な位相での世界観の表出を探りうるという利点をもっている。

個々の状況下で《生の隠喻》は多様で流動的なかたちをとる。一例として靈魂(スムンガット)をめぐる観念の異同をとりあげる。イバンの文化は一般的に言ってかなりはっきりした人格的靈魂の概念をもっているが、その属性は語る人ごとにしばしば相剋しあい、

ビルマの精霊信仰再考

佛教徒ビルマにおける精霊(Nat)信仰は佛教と併存あるいは対立するものと位置づけられ、両者が重層信仰をなしているとされる。しかし一般の村落生活において、Nat信仰は、生活の前面に出てくるものではなく、佛教と異なって人々の話題になることも少ない。Nat儀礼は専ら女性の手によって行われ、男性の一部はNatの存在に懷疑的で興味本位の受け

内堀基光

また自家撞着の言説に出会うこともまれではない。靈魂の形状、意識的人格との関係、靈魂の在処などについて人々の「知識」の変異は大きい。もし宗教に何らかの「原始性」の指標がありうるとすれば、正統あるいは公認教義の不在をその一つとしてあげることができよう。その意味でイバンの宗教はすぐれて「原始的」であるといってよい。こうした信仰体系を分析するとき、そこに形式論理上の整合性を求めるることは無益であり、むしろ生の隠喻的イメージがその場その場で形成あるいは選択されることに注目する必要がある。この形成・選択は状況に応じた行為者の関心に規定され、その時々で同一の言語的表象に異なった内容が付与されることになる。したがって、人類学者として民族宗教に接近するためには、個別文化に内在する隠喻の生成原理とその具体的状況下での発現とを区別することが探究の出発点となる。

田村克己

止め方をしている。それは宗教的位階の上で、Natが男性と女性の位の中間にくるとされるからである。このようにNatの存在に佛教的世界観の中に組み入れられている。何よりも佛教徒ビルマにとって、宗教(thadana)は佛教であり、Nat信仰は宗教と考えられていない。礼拝行為を指す語も両者において異なる。人々のNatに対する態度は、災厄除去

や願望成就のための手段の「操作」である。Nat 信仰には、こうした「操作」の具体化である個々の儀礼行為があるのみで、固有の世界観や教義の含まれるものでない。それらはあくまで仏教に依拠している。

ところでNatとくくられるものには様々なタイプが含まれる。そのうち代表的なのは「37柱のNat」と呼ばれるもので、Taungbyonなどのようにビルマ全土で伝説や祭祀の有名な信仰がある。また本来は単なる家や村の守護靈に対しても37柱中のNatが習合し、その性格や特徴が加えられている。37柱のNatの特徴の一つは、横死者の靈という点である。なぜそのような存在が信仰の対象となり、Nat 信仰を代表するものとなっているのであろうか。仏教との関連で考察を加える。

仏教においては、教義の上と、実際に説かれ人々に理解される教えとの間には、幾つかの矛盾が存在する。例えば人々は、来世でより幸せな、すなわち欲望のより満足される生への再生を願う。しかし本来の教えでは、欲

望がある以上、存在自体不幸であり、一切の消滅したところに究極の安らぎがあるとされる。こうした矛盾に対し、Natの存在は或る種の「解決」を提供する。すなわち欲望を肯定し、その実現による現世の幸福への「手段」を与える。他方で、時に恣意的に病気や災厄を送り、欲望と切り離された不幸をもたらすこと、仏教の教えの「誤り」を明らかにする。このようにNatの存在は、仏教の矛盾を別の形に置き換え示すことで「解決」する。37柱のNatが横死の特徴を持つのは、現世は苦痛であるにもかかわらず自らその生のサイクルを止めることのできない矛盾を、他者による死という形で「解決」するものである。

このようにNatの存在と信仰は、仏教の持つ矛盾を転換する一種の「装置」である。そしてそれはあくまで仏教の存在を前提としている。このNat 信仰がしばしば政治権力とパラレルな現象と理解されるのも、いづれもが仏教の「権力」の観念の矛盾を置き換えていくからである。

『形態と象徴』 —バリ島における集落プランの研究

小川都弘

バリ島における集落プランを宇宙論的位相で捉えた場合、最も仏教・ヒンドゥー教的モデルと整合性が強いとみられてきた『中心に十字路をもつ集落（以下ではB型集落と呼ぶ）』がどのような分布状態にあるのか。また、従来看過してきた集落プランは存在しないかという点を中心とした報告となった。

集落プランの検証に際してはCINCUSARPAC〔the U.S.Army Map Service, Far East撮影(1964)データを使用〕発行の1/5万地形図を使用し、その有効性を損じないために分析対象は長軸250m以上の集落標方に限定した。また、分析結果の信頼性を高めるために、若干の現地調査と先学作成のデータと対比を行なった。その結果は配布資料(図2~11)に示した。

要するに、先学によって紹介してきたB型集落は主としてBali Tengah地方下部(おもね海拔600m以下の水田卓越地域)において卓越し、同地方上部および西部辺境

(Tabanan県)においては別種の集落プラン、すなわちKaja-Kelod(任意の斜面に対してつねに上方と下方とを結ぶ)方向に装置された道路状の空閑地に沿って家屋群が輶状に布置された集落(以下ではA型集落と呼ぶ)が主流をなしていることを明らかにした。また地形図の分析ではA型と判定された集落の中にも、東部バリのTenganan PegringsinganやBug Bug村のごとく、中央に慣習家屋の集積した道路状広場をもち、その東西に家屋群が二分された集落(以下ではC型集落と呼ぶ)のあることが現地巡査によって知られた。

B型集落がNegaraの首長の居所(以下では館町と呼ぶ)のプランと同型性があることは別稿においてすでに言及したが、これはA型集落する辺境地帯で市場中心やTriwangsa層の集住する集落にしばしば現出している。例えばGeertz,Cが劇場国家論を展開した

や願望成就のための手段の「操作」である。Nat 信仰には、こうした「操作」の具体化である個々の儀礼行為があるのみで、固有の世界観や教義の含まれるものでない。それらはあくまで仏教に依拠している。

ところでNatとくくられるものには様々なタイプが含まれる。そのうち代表的なのは「37柱のNat」と呼ばれるもので、Taungbyonなどのようにビルマ全土で伝説や祭祀の有名な信仰がある。また本来は単なる家や村の守護靈に対しても37柱中のNatが習合し、その性格や特徴が加えられている。37柱のNatの特徴の一つは、横死者の靈という点である。なぜそのような存在が信仰の対象となり、Nat 信仰を代表するものとなっているのであろうか。仏教との関連で考察を加える。

仏教においては、教義の上と、実際に説かれ人々に理解される教えとの間には、幾つかの矛盾が存在する。例えば人々は、来世でより幸せな、すなわち欲望のより満足される生への再生を願う。しかし本来の教えでは、欲

望がある以上、存在自体不幸であり、一切の消滅したところに究極の安らぎがあるとされる。こうした矛盾に対し、Natの存在は或る種の「解決」を提供する。すなわち欲望を肯定し、その実現による現世の幸福への「手段」を与える。他方で、時に恣意的に病気や災厄を送り、欲望と切り離された不幸をもたらすこと、仏教の教えの「誤り」を明らかにする。このようにNatの存在は、仏教の矛盾を別の形に置き換え示すことで「解決」する。37柱のNatが横死の特徴を持つのは、現世は苦痛であるにもかかわらず自らその生のサイクルを止めることのできない矛盾を、他者による死という形で「解決」するものである。

このようにNatの存在と信仰は、仏教の持つ矛盾を転換する一種の「装置」である。そしてそれはあくまで仏教の存在を前提としている。このNat 信仰がしばしば政治権力とパラレルな現象と理解されるのも、いづれもが仏教の「権力」の観念の矛盾を置き換えていくからである。

『形態と象徴』 —バリ島における集落プランの研究

小川都弘

バリ島における集落プランを宇宙論的位相で捉えた場合、最も仏教・ヒンドゥー教的モデルと整合性が強いとみられてきた『中心に十字路をもつ集落（以下ではB型集落と呼ぶ）』がどのような分布状態にあるのか。また、従来看過してきた集落プランは存在しないかという点を中心とした報告となった。

集落プランの検証に際してはCINCUSARPAC〔the U.S.Army Map Service, Far East撮影(1964)データを使用〕発行の1/5万地形図を使用し、その有効性を損じないために分析対象は長軸250m以上の集落標方に限定した。また、分析結果の信頼性を高めるために、若干の現地調査と先学作成のデータと対比を行なった。その結果は配布資料(図2~11)に示した。

要するに、先学によって紹介してきたB型集落は主としてBali Tengah地方下部(おもね海拔600m以下の水田卓越地域)において卓越し、同地方上部および西部辺境

(Tabanan県)においては別種の集落プラン、すなわちKaja-Kelod(任意の斜面に対してつねに上方と下方とを結ぶ)方向に装置された道路状の空閑地に沿って家屋群が輶状に布置された集落(以下ではA型集落と呼ぶ)が主流をなしていることを明らかにした。また地形図の分析ではA型と判定された集落の中にも、東部バリのTenganan PegringsinganやBug Bug村のごとく、中央に慣習家屋の集積した道路状広場をもち、その東西に家屋群が二分された集落(以下ではC型集落と呼ぶ)のあることが現地巡査によって知られた。

B型集落がNegaraの首長の居所(以下では館町と呼ぶ)のプランと同型性があることは別稿においてすでに言及したが、これはA型集落する辺境地帯で市場中心やTriwangsa層の居住する集落にしばしば現出している。例えばGeertz,Cが劇場国家論を展開した

Taban がそうである。

B型集落は集落密度が低く、Bali Tengah 地方下部に本拠をおく Pasek Gel Gel 等の大『氏族』の主たる移住経路 (Sil Silah Sapta Rsi という、一種の『氏族』集団に関する神統譜の分析から推定される) からはずれ、来住者身分の居所呼称と考えられる Br. Dukuh が多く分布する地方において卓越する。こうした分布状態に対して文化周囲論的解釈が許されるならば、従来看過されてきた A型集落は B型集落よりもバリ集落の『原型』に近い様式をとどめているといえるだろう。報告では A型集落の中央にある道路状の空閑地が寺院・集会場等の慣習家屋の外庭的機能を担っているという見解を提示し、また館町 Bangli の事例は A型集落から B型集落への遷移を暗示していると述べた。なお象徴に関しては Tenganan Pegring singan 村の場合、Banjar の東西断面が動物区画 (Tebe)・人間区画 (Karang)・神区画 (Awangan)・

人間区画・動物区画より構成され、神区画の中央には公衆浴場 (Permandian Umu) から導水される石組水路が通じ、慣習家屋群はその線上に布置されていること、そしてこの神区画を浄化するための水路を分割線として Banjar が記号的に 2組(左右)の〔動物・人間・神〕区画に分かたれているという指摘にとどまった。

戦前からバリ島の Socio-Cosmology に言及するさい、例外なくひきあいに出されてきたのは B型集落(中心と周縁をなす、4辺の構造 ($2n+1$ 、この場合、 $n=2$ 、 $+1$ は中心をなす) であった。これは集落プランと仏教・ヒンドゥー教的宇宙論との整合性を強調するためにかなり恣意的に提示されてきたという感が強い。なお、報告では長軸 250 m 以上の集落標本に対象を限定したが、Original hillman と呼ばれる人々の居住する辺境畑作地帯には散村・小村等の小規模集落が多いことを最後に加えておく

ビルマ固有法に対する仏教の影響 — マヌヂェ・ダムマタッの場合 —

一般的に「固有法」と言う場合、その定義は必ずしも一様ではない。こゝでは、ビルマの古代から 19世紀後半、コンバウン王朝崩壊に至る時期において、伝統的に存在した世俗社会の「法」という限定的な意味で用いている。

このビルマ固有法の中核をなしたものは、パーリ語でダムマサッタム (Pali Dhammasattham)、ビルマ語でダムマタッ (Dhammathat) と呼ばれる「法律書」である。パーリ・ダムマサッタムとは、インド文化が支配的であった古代下ビルマにおいて、先住民であったモン族が古代インドの宗教法典として知られるマヌ法典 (Mānavā-dharmaśāstra) をはじめとするサンスクリット・ダルマシャーストラ (Sanskrit Dharmasāstras) の司法に関する法規定 (vyavahāra) の部分のみを枠組として利用し、モン族慣習法として改作した「法律書」を、さらにビル

奥 平 龍 二

マ王の要請に基づきパーリ語で編さんしたものである。この流れをくむ「法律書」が歴代ビルマ王の治世に、ダムマタッとして、ビルマ語訳され、あるいは書き改められながら、漸次ビルマ化されて行った。18世紀中葉、アラウンパヤ王治世に書かれたマヌヂェ・ダムマタッ (Manugye Dhammathat) に至って、はじめて平易なビルマ語散文で書かれ、こゝにビルマ独自の「法律書」が誕生した。

マヌヂェは、慣習、文化、社会、法律などのあらゆる側面を扱った、いわば百科全書的性格を有するもので、諸々のダムマタッの代表的存在として、またコンバウン王朝時代の社会の鏡として歴代王によって重宝されたが、後に英領ビルマの司法判決においても欠かせない参考書として活用された。

マヌヂェは全体が 14 章に分けられ、各章とも処理された係争や慣習などについて多くの項目を立て、こと細かく記録している。そ

Taban がそうである。

B型集落は集落密度が低く、Bali Tengah 地方下部に本拠をおく Pasek Gel Gel 等の大『氏族』の主たる移住経路 (Sil Silah Sapta Rsi という、一種の『氏族』集団に関する神統譜の分析から推定される) からはずれ、来住者身分の居所呼称と考えられる Br. Dukuh が多く分布する地方において卓越する。こうした分布状態に対して文化周囲論的解釈が許されるならば、従来看過されてきた A型集落は B型集落よりもバリ集落の『原型』に近い様式をとどめているといえるだろう。報告では A型集落の中央にある道路状の空閑地が寺院・集会場等の慣習家屋の外庭的機能を担っているという見解を提示し、また館町 Bangli の事例は A型集落から B型集落への遷移を暗示していると述べた。なお象徴に関しては Tenganan Pegring singan 村の場合、Banjar の東西断面が動物区画 (Tebe)・人間区画 (Karang)・神区画 (Awangan)・

人間区画・動物区画より構成され、神区画の中央には公衆浴場 (Permandian Umu) から導水される石組水路が通じ、慣習家屋群はその線上に布置されていること、そしてこの神区画を浄化するための水路を分割線として Banjar が記号的に 2組(左右)の〔動物・人間・神〕区画に分かたれているという指摘にとどまった。

戦前からバリ島の Socio-Cosmology に言及するさい、例外なくひきあいに出されてきたのは B型集落(中心と周縁をなす、4辺の構造 ($2n+1$ 、この場合、 $n=2$ 、 $+1$ は中心をなす) であった。これは集落プランと仏教・ヒンドゥー教的宇宙論との整合性を強調するためにかなり恣意的に提示されてきたという感が強い。なお、報告では長軸 250 m 以上の集落標本に対象を限定したが、Original hillman と呼ばれる人々の居住する辺境畑作地帯には散村・小村等の小規模集落が多いことを最後に加えておく

ビルマ固有法に対する仏教の影響 — マヌヂェ・ダムマタッの場合 —

一般的に「固有法」と言う場合、その定義は必ずしも一様ではない。こゝでは、ビルマの古代から 19世紀後半、コンバウン王朝崩壊に至る時期において、伝統的に存在した世俗社会の「法」という限定的な意味で用いている。

このビルマ固有法の中核をなしたものは、パーリ語でダムマサッタム (Pali Dhammasattham)、ビルマ語でダムマタッ (Dhammathat) と呼ばれる「法律書」である。パーリ・ダムマサッタムとは、インド文化が支配的であった古代下ビルマにおいて、先住民であったモン族が古代インドの宗教法典として知られるマヌ法典 (Mānavā-dharmaśāstra) をはじめとするサンスクリット・ダルマシャーストラ (Sanskrit Dharmasāstras) の司法に関する法規定 (vyavahāra) の部分のみを枠組として利用し、モン族慣習法として改作した「法律書」を、さらにビル

奥 平 龍 二

マ王の要請に基づきパーリ語で編さんしたものである。この流れをくむ「法律書」が歴代ビルマ王の治世に、ダムマタッとして、ビルマ語訳され、あるいは書き改められながら、漸次ビルマ化されて行った。18世紀中葉、アラウンパヤ王治世に書かれたマヌヂェ・ダムマタッ (Manugye Dhammathat) に至って、はじめて平易なビルマ語散文で書かれ、こゝにビルマ独自の「法律書」が誕生した。

マヌヂェは、慣習、文化、社会、法律などのあらゆる側面を扱った、いわば百科全書的性格を有するもので、諸々のダムマタッの代表的存在として、またコンバウン王朝時代の社会の鏡として歴代王によって重宝されたが、後に英領ビルマの司法判決においても欠かせない参考書として活用された。

マヌヂェは全体が 14 章に分けられ、各章とも処理された係争や慣習などについて多くの項目を立て、こと細かく記録している。そ

の構成上の主な特徴は、(1)初期パーリ・ダムマサッタムにおける vyavahāra の枠組が相当崩れてしまっている、(2)法の淵源が多種多様である、特に(3)17世紀前半にダムマタッに關する王の質問に対する答申書の形で書かれたマハーラージャサッタム(Mahārājasattham)が仏教のソースを多々参考にしたことに刺激された、その結果(4)三蔵經典の中から規範となりうる訓戒を隨所に引用するなど、第1章の宇宙發生論的原文の物語にはじまり法文全体が仏教倫理思想で貫ぬかれている、などの点である。

このようにしてマヌデュにおいては、マヌは形式的には法律の最高権威として位置付けられているものの、そこでマヌが解説したのはビルマの法と慣習であり、実質的にはマヌ

は仏・法・僧のいわゆる三宝の威信ある代弁者へと変質している。

マヌデュは初期パーリ・ダムマサッタムの流れをくみながらも、最もビルマ化された「法律書」としての代表的存在であり、現代ビルマ法の礎となつたが、さらに意義深いことは、フランス人法制史家リエンガーも指摘しているとおり、それが古代サンスクリット・ダルマシャーストラの原型と同様、「正義のガイダンス」、あるいは「道徳的裝備」たることを目指していることである。このことは、現代ビルマ社会を動かしている編成原理あるいは指導原理の重要な側面がマヌデュの中に今なお、生息を保つていることを示すものであり、こゝにマヌデュの現代史的役割が見出すことが出来る。

ジャワ村落における社会変容の一考察 — 1930～40年代を中心 —

ジャワ島東端の旧ブスキ州一帯は、オランダ時代から、いわゆるエstate農業部門においても、また住民農業部門においても、非常に重要な経済的役割を担ってきた。それだけに、1930年代の世界恐慌期から1940年代前半の日本軍政期にかけて、この地方が体験した経済的・社会的変容は少なからざるものであった。

その変容の最も著しいものは、エstate農業、とりわけ糖業の衰退である。ブスキ州には1930年段階で11の糖業エstateが存在していたが、砂糖の国際価格の大暴落に伴ない1935年頃までにはその大半は操業の停止あるいは縮小を余儀なくされた。この地方では從来、「21年半契約」によって農民の土地が長期的に糖業エstateに貸しつけられていたが、恐慌期にはエstateは、わずかな補償金を支払っただけで地代の支払いを停止した。また、エstateでの賃金労働による現金収入に生活の多くを依存していた貧農たちは、操業停止や縮小によって生活の基盤を脅やかされることになった。納税その他のために不可欠な現金は、従って、原住民

倉沢愛子

農業部門の食糧生産物（それは從来大部分が農家の自家消費用であった）を売却して獲得せねばならなかつたが、しかし1930年代には米価も恐慌前の3分の1に下がつてゐた。こうして農家経済は著しく脅やかされ、農民の多くは、現金収入獲得のため借金奴隸と化してゆく現象がみられた。

1935年を底辺として景気は徐々に回復に向つたが、それがいまだに十分な立ち直りを見せないうちに、世界大戦の開始となり、ジャワは1942年3月以来日本軍の占領下におかれようになつた。軍政下では輸出入ルートの断絶、およびその一方で、食糧（とりわけ米）生産物の需要拡大というファクターにより、ジャワの産業構造は大きな変容を余儀なくされた。すなわち、恐慌によりすでに打撃を打けていたエstate農業部門はますます縮小され、それらの農地は食糧生産へ転化された。農民に対しては、一定量の穀を強制的に低価格で政府へ引き渡すという「供出」政策が課せられた。ジャワの重要な穀倉地帯であったブスキでは、収穫の約50%が供出米として割り当てられたため、農民は極めて

の構成上の主な特徴は、(1)初期パーリ・ダムマサッタムにおける vyavahāra の枠組が相当崩れてしまっている、(2)法の淵源が多種多様である、特に(3)17世紀前半にダムマタッに關する王の質問に対する答申書の形で書かれたマハーラージャサッタム(Mahārājasattham)が仏教のソースを多々参考にしたことに刺激された、その結果(4)三蔵經典の中から規範となりうる訓戒を隨所に引用するなど、第1章の宇宙發生論的原文の物語にはじまり法文全体が仏教倫理思想で貫ぬかれている、などの点である。

このようにしてマヌデュにおいては、マヌは形式的には法律の最高権威として位置付けられているものの、そこでマヌが解説したのはビルマの法と慣習であり、実質的にはマヌ

は仏・法・僧のいわゆる三宝の威信ある代弁者へと変質している。

マヌデュは初期パーリ・ダムマサッタムの流れをくみながらも、最もビルマ化された「法律書」としての代表的存在であり、現代ビルマ法の礎となつたが、さらに意義深いことは、フランス人法制史家リエンガーも指摘しているとおり、それが古代サンスクリット・ダルマシャーストラの原型と同様、「正義のガイダンス」、あるいは「道徳的裝備」たることを目指していることである。このことは、現代ビルマ社会を動かしている編成原理あるいは指導原理の重要な側面がマヌデュの中に今なお、生息を保つていることを示すものであり、こゝにマヌデュの現代史的役割が見出すことが出来る。

ジャワ村落における社会変容の一考察 — 1930～40年代を中心 —

ジャワ島東端の旧ブスキ州一帯は、オランダ時代から、いわゆるエstate農業部門においても、また住民農業部門においても、非常に重要な経済的役割を担ってきた。それだけに、1930年代の世界恐慌期から1940年代前半の日本軍政期にかけて、この地方が体験した経済的・社会的変容は少なからざるものであった。

その変容の最も著しいものは、エstate農業、とりわけ糖業の衰退である。ブスキ州には1930年段階で11の糖業エstateが存在していたが、砂糖の国際価格の大暴落に伴ない1935年頃までにはその大半は操業の停止あるいは縮小を余儀なくされた。この地方では從来、「21年半契約」によって農民の土地が長期的に糖業エstateに貸しつけられていたが、恐慌期にはエstateは、わずかな補償金を支払っただけで地代の支払いを停止した。また、エstateでの賃金労働による現金収入に生活の多くを依存していた貧農たちは、操業停止や縮小によって生活の基盤を脅やかされることになった。納税その他のために不可欠な現金は、従って、原住民

倉沢愛子

農業部門の食糧生産物（それは從来大部分が農家の自家消費用であった）を売却して獲得せねばならなかつたが、しかし1930年代には米価も恐慌前の3分の1に下がつてゐた。こうして農家経済は著しく脅やかされ、農民の多くは、現金収入獲得のため借金奴隸と化してゆく現象がみられた。

1935年を底辺として景気は徐々に回復に向つたが、それがいまだに十分な立ち直りを見せないうちに、世界大戦の開始となり、ジャワは1942年3月以来日本軍の占領下におかれようになつた。軍政下では輸出入ルートの断絶、およびその一方で、食糧（とりわけ米）生産物の需要拡大というファクターにより、ジャワの産業構造は大きな変容を余儀なくされた。すなわち、恐慌によりすでに打撃を打けていたエstate農業部門はますます縮小され、それらの農地は食糧生産へ転化された。農民に対しては、一定量の穀を強制的に低価格で政府へ引き渡すという「供出」政策が課せられた。ジャワの重要な穀倉地帯であったブスキでは、収穫の約50%が供出米として割り当てられたため、農民は極めて

厳しい食糧難に直面することになった。もちろん政府当局は大規模なキャンペーンを展開して食糧増産に努めたが、住民は急激な経済構造の変化に十分対処しきれなかったため、糖業の縮小は必らずしもそれに見合うだけの稻作の収量増加をもたらさなかった。こうして30年代の恐慌の打撃からまだ十分に回復していないかった農家経済はさらに窮迫し農村社会に混乱をもたらした。経済不安は、当然のことながら全般的な社会不穏を誘発する。とりわけ、人口に比して農業生産性の高かったブスキでは、それだけ当局の住民に対する要求や締めつけも厳しく、一種の恐怖政治ともいえるような弾圧的な統治が行なわれていたため、民心は不安定であった。日本当局の命令の直接的実行者となるべき地方行政官（パングレ・プラジャ）に対する中央政府の干渉も強く、たとえば、日本軍政期を通じて全ジャワでみられた7件の県長罷免中5件までがこの州で発生している。また郡長、村長をも含めた罷免でみると、53件中35件までがブスキ州で発生している。さらに、1943年末から1944年初頭にかけて、同州北海岸のパナルカン県では、県長を初め、全都長（4名）、全村長（14名）が憲兵隊に逮捕・処刑されて入れ替わるという異常事態が発生している。その背景としては、この地域の地理的条件の故に日本軍が通敵行為やその他の転覆活動にとりわけ神経をとがらせていたことや、この地域はジャワ人とマドゥラ人の混合地帯

であり、そのことが從来から社会不安や住民間の対立の一因となっていたことなども当然考慮に入れねばならないが、それに加えて、経済的重要性と、その故にパングレ・プラジャに課された圧力の大きさというファクターも見逃してはならないであろう。それを物語るかのように、パナルカン県下では、このパングレ・プラジャ大量殺害以後、糸供出実績は異常なまでに上り、多くの地区で割り当て高を上回る供出が記録されている。

このように、30年代から40年代にかけてのブスキ州は、さまざまな社会的・経済的问题をかかえ、各種の変容を余儀なくされていた。同州は確かに、地理的、経済的、文化的にかなり特殊な地域であり、決してジャワの典型的な社会と考えることはできないであろう。しかしながら、ジャワのどの地域でも多かれ少なかれかかえていた諸問題が、ここではいっそう濃縮された形で現われていたということはいえよう。その現われ方は多少極端であっても、変化の方向性自体はどの地域にも共通のものである。この時期の社会変容は、さまざまな形でその後のジャワ社会に大きな痕跡を残している。とりわけ、エストート農業の衰退と、食糧生産部門の拡大発展は、独立後のジャワ社会の新しい産業構造として定着しているが、この変化への決定的な第一歩を踏み出したのはまさしくこの時期なのである。

フィリピンの Sto. Niño 信仰 とくに Religious Samahan との関連で

寺 田 勇 文

フィリピン人カトリック教徒の宗教生活においては幼年時代のイエズスである Sto. Niño を崇敬 (devotion) の対象とする Sto. Niño 信仰が重要な位置を占めている。Sto. Niño de Cebu 伝説にみられるように、Sto. Niño 信仰はフィリピンのカトリシズムに内在する土着信仰の諸要素を理解する上で中心的な課題となりうる。発表者は現地調査（ラグーナ州M町にて1980年10月～81年9月）よ

り得られたデータをもとに、Sto. Niño 信仰の実態を民間信仰集団であるサマハン (Religious Samahan) との関係において把握しようと試みた。サマハンは熱心なカトリック教徒により組織された信仰集団であるが小教区のカトリック教会からは非難あるいは無視されている。サマハンの活動・儀礼の中心は指導者（女性）がトランス状態に入った時におこなわれるメンバーと Sto. Niño との「直接

厳しい食糧難に直面することになった。もちろん政府当局は大規模なキャンペーンを展開して食糧増産に努めたが、住民は急激な経済構造の変化に十分対処しきれなかったため、糖業の縮小は必らずしもそれに見合うだけの稻作の収量増加をもたらさなかった。こうして30年代の恐慌の打撃からまだ十分に回復していないかった農家経済はさらに窮迫し農村社会に混乱をもたらした。経済不安は、当然のことながら全般的な社会不穏を誘発する。とりわけ、人口に比して農業生産性の高かったブスキでは、それだけ当局の住民に対する要求や締めつけも厳しく、一種の恐怖政治ともいえるような弾圧的な統治が行なわれていたため、民心は不安定であった。日本当局の命令の直接的実行者となるべき地方行政官（パングレ・プラジャ）に対する中央政府の干渉も強く、たとえば、日本軍政期を通じて全ジャワでみられた7件の県長罷免中5件までがこの州で発生している。また郡長、村長をも含めた罷免でみると、53件中35件までがブスキ州で発生している。さらに、1943年末から1944年初頭にかけて、同州北海岸のパナルカン県では、県長を初め、全都長（4名）、全村長（14名）が憲兵隊に逮捕・処刑されて入れ替わるという異常事態が発生している。その背景としては、この地域の地理的条件の故に日本軍が通敵行為やその他の転覆活動にとりわけ神経をとがらせていたことや、この地域はジャワ人とマドゥラ人の混合地帯

であり、そのことが從来から社会不安や住民間の対立の一因となっていたことなども当然考慮に入れねばならないが、それに加えて、経済的重要性と、その故にパングレ・プラジャに課された圧力の大きさというファクターも見逃してはならないであろう。それを物語るかのように、パナルカン県下では、このパングレ・プラジャ大量殺害以後、糸供出実績は異常なまでに上り、多くの地区で割り当て高を上回る供出が記録されている。

このように、30年代から40年代にかけてのブスキ州は、さまざまな社会的・経済的问题をかかえ、各種の変容を余儀なくされていた。同州は確かに、地理的、経済的、文化的にかなり特殊な地域であり、決してジャワの典型的な社会と考えることはできないであろう。しかしながら、ジャワのどの地域でも多かれ少なかれかかえていた諸問題が、ここではいっそう濃縮された形で現われていたということはいえよう。その現われ方は多少極端であっても、変化の方向性自体はどの地域にも共通のものである。この時期の社会変容は、さまざまな形でその後のジャワ社会に大きな痕跡を残している。とりわけ、エストート農業の衰退と、食糧生産部門の拡大発展は、独立後のジャワ社会の新しい産業構造として定着しているが、この変化への決定的な第一歩を踏み出したのはまさしくこの時期なのである。

フィリピンの Sto. Niño 信仰 とくに Religious Samahan との関連で

寺 田 勇 文

フィリピン人カトリック教徒の宗教生活においては幼年時代のイエズスである Sto. Niño を崇敬 (devotion) の対象とする Sto. Niño 信仰が重要な位置を占めている。Sto. Niño de Cebu 伝説にみられるように、Sto. Niño 信仰はフィリピンのカトリシズムに内在する土着信仰の諸要素を理解する上で中心的な課題となりうる。発表者は現地調査（ラグーナ州M町にて1980年10月～81年9月）よ

り得られたデータをもとに、Sto. Niño 信仰の実態を民間信仰集団であるサマハン (Religious Samahan) との関係において把握しようと試みた。サマハンは熱心なカトリック教徒により組織された信仰集団であるが小教区のカトリック教会からは非難あるいは無視されている。サマハンの活動・儀礼の中心は指導者（女性）がトランス状態に入った時におこなわれるメンバーと Sto. Niño との「直接

的」コミュニケーションにある。また、崇敬の形態は教会の公式のミサやロザリオの祈りに類似してはいるが、より土着的・神秘的な様相を呈している。

サマハンの会合は *gamutan*（治療所の意味）で毎週定期的に開かれ、ロザリオの祈りの最中に指導者がトランス状態に入る。これは Sto. Niño の靈が指導者の身体に宿ったものと信じられ、彼女は Sto. Niño として幼児語（一人称）でメンバーに語りかける。そのメッセージの内容は、カトリック教徒としての生活倫理、カトリックの年中行事の解釈や意味づけ、サマハンの活動方針、薬用植物の用い方、稻を植える時期と方法などメンバーと共に通する事柄の他、家庭不和や対人関係、就職問題などメンバーの個人的な悩みごとにに対する解答や問題解決のための指針などが含まれている。トランス状態でいやし行為や聖体拝領、各種の祝福をおこなう場合もある。このような儀礼には Sto. Niño の靈を呼びよせるための歌や踊りなどが付随しているが、

儀礼の形態はその骨格においては前スペイン時代よりおこなわれていた精靈信仰の形態と深いつながりがある、と考えられる。

現在、フィリピンのカトリック教会は世俗化の波にのみ込まれ、また新宗教運動の教勢の拡大に脅されており、教会運営の改革＝近代化を進めつつある。その結果、小教区レベルでは教会運営は少数のエリートに独占されつつあり、教育のない貧しい、しかし熱心な信徒らは教会を中心とした宗教生活から疎外されている。このような状況下で、サマハンにおいては Sto. Niño の靈が指導者の身体に宿ることにより、Sto. Niño との直接的コミュニケーションの場が保証され、メンバーはそこで彼らにとってより身近な信仰表現の機会を与えられている。

発表者は今後、このような Sto. Niño 信仰に関する一次資料をさらに集積しフィリピンのカトリシズムに内在する民間信仰的諸要素をあきらかにしていきたいと考える。

＜公開講演＞

生態学から見た東南アジア

東南アジアには5つの生態区がある。北より大陸部の山地部、平原部、デルタ部、それに島嶼部の低地帯と高山区である。

山地部とは上ビルマ、北タイ、ラオス、ベトナム北部などである。これは本来常緑林からなり、それは焼畑民の住む山腹と灌漑移植水稻民の住む谷底からなる。後者では、12～13世紀には灌漑稻作が確立しており、以後、灌漑のための共同作業や配水のための協議等を軸とした水利社会が発達する。この谷底水稻圏はここより雲南、広西を経て嶺南山脈につらなり、日本に至っている。

平原は本来、落葉性の雨緑林でおおわれた所である。これはタイの場合だと、古くは森の物産と焼畑の空間であったらしい。焼畑で作られていたものは短粒稻であり、北の山地部の焼畑農業の延長であったと考えられる。

高 谷 好 一

しかし、11世紀ぐらいになるとインド系の長粒稻によって置換されてゆく。私は短粒稻を持った者はモン人であり、クメール人がそれを長粒稻でおきかえてゆくと考えている。この長粒稻は後にはシャム人に受けつがれ、大発展をとげてゆく。

デルタは本来、湛水と乾燥が季節的に交互する草原である。これは19世紀後半、植民地経済の要請のもとに、米プランテーションの場として開かれる。ここに導入される稻作技術は平原の技術であり、したがって、インド系技術である。デルタには中国系稻作技術は全く認められない。

島嶼部低地帯は熱帶降雨林地帯である。ここは旺盛すぎる樹木の生長のために、地表は植物遺体のみで覆われており土壤がない。このため農業が行なわれず、森の物産のみが利

的」コミュニケーションにある。また、崇敬の形態は教会の公式のミサやロザリオの祈りに類似してはいるが、より土着的・神秘的な様相を呈している。

サマハンの会合は *gamutan*（治療所の意味）で毎週定期的に開かれ、ロザリオの祈りの最中に指導者がトランス状態に入る。これは Sto. Niño の靈が指導者の身体に宿ったものと信じられ、彼女は Sto. Niño として幼児語（一人称）でメンバーに語りかける。そのメッセージの内容は、カトリック教徒としての生活倫理、カトリックの年中行事の解釈や意味づけ、サマハンの活動方針、薬用植物の用い方、稻を植える時期と方法などメンバーと共に通する事柄の他、家庭不和や対人関係、就職問題などメンバーの個人的な悩みごとにに対する解答や問題解決のための指針などが含まれている。トランス状態でいやし行為や聖体拝領、各種の祝福をおこなう場合もある。このような儀礼には Sto. Niño の靈を呼びよせるための歌や踊りなどが付随しているが、

儀礼の形態はその骨格においては前スペイン時代よりおこなわれていた精靈信仰の形態と深いつながりがある、と考えられる。

現在、フィリピンのカトリック教会は世俗化の波にのみ込まれ、また新宗教運動の教勢の拡大に脅されており、教会運営の改革＝近代化を進めつつある。その結果、小教区レベルでは教会運営は少数のエリートに独占されつつあり、教育のない貧しい、しかし熱心な信徒らは教会を中心とした宗教生活から疎外されている。このような状況下で、サマハンにおいては Sto. Niño の靈が指導者の身体に宿ることにより、Sto. Niño との直接的コミュニケーションの場が保証され、メンバーはそこで彼らにとってより身近な信仰表現の機会を与えられている。

発表者は今後、このような Sto. Niño 信仰に関する一次資料をさらに集積しフィリピンのカトリシズムに内在する民間信仰的諸要素をあきらかにしていきたいと考える。

＜公開講演＞

生態学から見た東南アジア

東南アジアには5つの生態区がある。北より大陸部の山地部、平原部、デルタ部、それに島嶼部の低地帯と高山区である。

山地部とは上ビルマ、北タイ、ラオス、ベトナム北部などである。これは本来常緑林からなり、それは焼畑民の住む山腹と灌漑移植水稻民の住む谷底からなる。後者では、12～13世紀には灌漑稻作が確立しており、以後、灌漑のための共同作業や配水のための協議等を軸とした水利社会が発達する。この谷底水稻圏はここより雲南、広西を経て嶺南山脈につらなり、日本に至っている。

平原は本来、落葉性の雨緑林でおおわれた所である。これはタイの場合だと、古くは森の物産と焼畑の空間であったらしい。焼畑で作られていたものは短粒稻であり、北の山地部の焼畑農業の延長であったと考えられる。

高 谷 好 一

しかし、11世紀ぐらいになるとインド系の長粒稻によって置換されてゆく。私は短粒稻を持った者はモン人であり、クメール人がそれを長粒稻でおきかえてゆくと考えている。この長粒稻は後にはシャム人に受けつがれ、大発展をとげてゆく。

デルタは本来、湛水と乾燥が季節的に交互する草原である。これは19世紀後半、植民地経済の要請のもとに、米プランテーションの場として開かれる。ここに導入される稻作技術は平原の技術であり、したがって、インド系技術である。デルタには中国系稻作技術は全く認められない。

島嶼部低地帯は熱帶降雨林地帯である。ここは旺盛すぎる樹木の生長のために、地表は植物遺体のみで覆われており土壤がない。このため農業が行なわれず、森の物産のみが利

用されるというかたちをとっている。ヨーロッパ勢力の到来後は、採取からプランテーションというかたちで木本植物が利用されるようになった。

島嶼部高地区の代表例は、例えばトラジャ族の居住区である。これらは高度的に熱帯降雨水林の外に突出し、いわゆる常春の世界を作っている。これは人間生活には好適な地であり、早くから人口の集中と農耕文化が熟成した。この農耕文化は、しかし、ブル稻と蹄耕の組合せで象徴される如く極めて特異である。これは外界を隔絶された状態で築かれた焼畑農業の極相と考えられる。育種学的にい

うと、ブル稻は日本稻に近縁である。雲南に発して北行したものが弥生稻作を導き、南行したものが、ブル稻・蹄耕稻作を導いたと考えてよい。私はこれは、いわゆるドンソン文化と関係のあるものと考えている。

以上、東南アジアは農耕史的にみると三つの流れからなると考えられようである。第一は山の背をつたわるブル・蹄耕稻作という古層の稻作。第二は11世紀頃大陸部東南アジアの主体部に大規模に侵入してくるインド系稻作。それから第三には農耕を欠如する森の世界、島嶼部東南アジアの低地帯である。

各地区例会の活動状況

〔関東月例会〕

昨年(1981年)9月に開始された関東月例会は、本年10月で10回目を迎えた。月例会は、原則として毎月最終土曜日の午後1時~4時、本郷学士会館分館にて催されている。以下、本年1月以降の発表者とそのテーマを紹介し、この研究会の活動状況をお知らせしたい。

1月30日 関本照夫(一橋大)「最近のジャワにおける聖墓巡礼の盛行について」

3月27日 早瀬晋三(マードック大学大学院)「フロンティアに於ける少数民族—アメリカ植民地初期のダバオの場合(1899-1910)ー」

4月24日 奥平竜二(東外大)「ビルマ固有法の特徴—マヌデュ=ダムマタッを中心としてー」

5月29日 加治明(大東文化大)「雲南西

〔双版納傣族の水利灌溉制度〕

7月24日 鈴木佑司(法政大)「1930年代のインドネシアの政治思想—タン=マラカーー」

10月2日 結城史隆(東大大学院)「フィリピン、ミンダナオ島、ブキノン族の社会組織」

10月30日 市川健二郎(東京水産大)「陳嘉庚—ある華僑の心の故郷ー」

また、月例会では研究発表の他、毎回書評や文献紹介も併せて行なっている。定期的に案内を希望される方は、通信費500円を同封の上、〒113 東京都文京区本郷7-3-1 東大文学部 永積昭研究室 気付 東南アジア史学会関東例会事務局、まで連絡されたい。

(弘末雅士)

〔関西例会〕

当例会は毎月最終土曜日の午後2時半から5時半まで、京大東南ア研で行なわれている(連絡先は 〒606 京都市左京区吉田下阿達町46 京大東南アジア研究センター 石井研

究室 TEL. 075-751-2111 EX. 7315)。本年の開催状況は以下の通りである。

第60回(1月30日)高谷好一(京大)「地理学者の見た東南アジア史」

第61回（2月27日）北原淳（神戸大）・赤木攻（大外大）「タイ農村社会の現状」

第62回（3月27日）加藤剛（京大）「ジャカルタの小さな民」

第63回（4月24日）桜井由躬雄（京大）「東・東南アジア水稻社会における割地制の分布と展開」

第64回（5月29日）記念講演：Prof. Wong Ling-Ken & Prof. S. H. Alatas（シンガポール大）

第65回（6月26日）大西和彦（大谷大）

「広南王国の寺院について」

第66回（7月24日）斎司郎（大外大）「ビルマ語文献と言語研究」

第67回（9月25日）深見純生（神戸大）「イスラム同盟と人民の要求（1915-23）」

第68回（10月30日）野村 享
「奈良時代のラーマーヤナ」
また昨年発足した「漢籍を読む会」は、『通典』を終えて『嶺外代答』を読み始めている。こちらは毎月第1土曜日に京大東南ア研で行なわれている。
(桃木至朗)

学会誌編集状況

東南アジア—歴史と文化 1982年度発行No.12 予定目次（仮題をふくむ）

【論 文】

- ビルマ古代法におけるインド法の受容とその限界 奥平 龍二
納西族の種族形成 村井 信幸
歴代宝案第一集における火長について 高瀬 恭子

【研究ノート】

- 初期南方軍政のふたつのタイプ … 岩武 照彦
中国南部沿海文化圏の設定と深索 白鳥 芳郎

【書評・紹介】

- 石沢良昭『古代カンボジア史研究』 山本 達郎
広州・中山大学東南亞研究所の近刊文献 和田 久徳
キンスウェー『わが祖国』 … 根本 敬
アヌマン・ラーチャトン『回想のタイ』 伊東 照司
M.R. Godley, The Mandarin-capitalists from Nanyang 市川健二郎

【モンスーン＝学界消息】

- カリマンタン公司関係文献 長岡新治郎
香港島漁村調査概報 加治 明
雲南の定期刊行物近況 長谷川 清、栗原 悟
東南アジア史学会関東例会の動向 弘末 雅士
東南アジア史学会中部地区の動向 明石 陽至
東南アジア史学会関西例会の動向 桃木 至朗
広島大学東南アジア研究会の近況 今永 清二

【追 悼】

- コーネル大学エコルズ先生をしのぶ 永積 昭
東南アジア関係文献目録 加治 明、伊東 照司

なお、No.13の投稿は、昭和58年9月末日まで受付けておりますので、「執筆要領」を御参照のうえ御投稿下さるようお願いします。

新 委 員 の 委 屬

昭和57年9月、九州地区委員石沢良昭氏の辞任に伴ない、新たに同委員を宮崎大学教育学部の山内正博氏にお引き受けいただくことになりました。（鈴木 中正）

名 簿 の 改 訂

昭和53年4月付の旧名簿を昭和57年5月付で全面的に改訂致しました。会員相互の交流に御利用下さい。作業上の手違い等により不備な点もあろうかと思われます。お気付きの点は事務局までお知らせ下さいますようお願い申し上げます。記載事項の変更並びに新入会員の紹介等と共に、今後会報にて訂正させていただきます。

昭和57年10月 発行

発行者 東南アジア史学会(鈴木中正)

住所 〒440 愛知県豊橋市町畠町1-1
愛知大学文学部 伊東利勝研究室

電話 〈0532〉45-0441 内線295・311
郵便振替 名古屋7-56613 東南アジア史学会